兵庫人 輝く

神戸新聞社・編

困難を乗り越え　信念を貫いて
輝ける業績に結実させる――

人材の宝庫・兵庫県ゆかりの傑物と新星たちの軌跡
神戸新聞大型連載「新兵庫人 輝く」を単行本化

壊れ、自宅兼工場も全壊。借金が残った。

「父が正しかった」。松本は、先人の教えに耳を傾けることの重要性を悟った。

「何とかしなくては」。取引先は主に寺だったが、返済のため松本は百貨店に売り込みをかけた。年間約30店を回り少しずつ販路を広げた。

新商品として、表面を彩った「絵ろうそく」を思いつく。東北地方では、花のない冬の時期、花を描いたろうそくを仏壇にあげる習慣がある。「関西でも広められないか」

ただ、機械化の失敗を思い出し、今度は先人に相談。知人の住職から「絵ろうそくは、亡くなった方に花を届ける意味がある。いいかもしれない」と励まされたことで、決断した。絵ろうそくは順調に売れ、今では主力商品だ。

2006年には神戸・北野工房のまちにも出店、観光客にもPRする。「職人も、外に出れば商売人にならなくてはいけない」。今も祖父の生前の言葉をかみしめる。

（2010・10・31）

（1）学術登山の伝統

人類初の頂を求めて

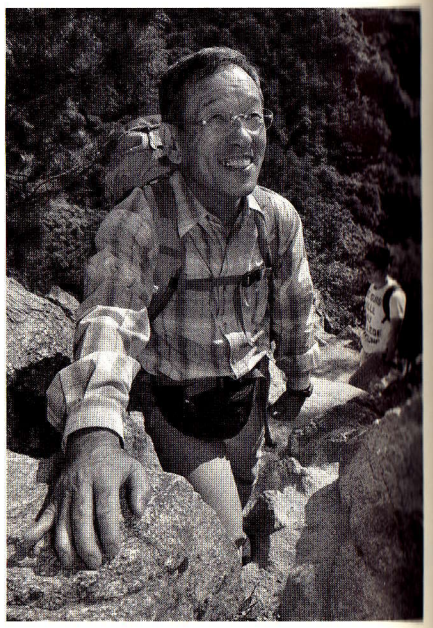
標高4890メートル地点のキャンプから、双眼鏡で若い隊員2人のアタックを見守った。

6805メートルの頂上まで残り10メートル少し。1人は酸素不足による高度障害で意識がもうろうとなり、深い雪に阻まれ、体が前に進まない。下山に必要な時間を考えると、アタックにかける時間はもうほとんどなかった。

下山すべきとの意見もあった。しかし、隊長の井上達男（63）はトランシーバーで指示した。「あと30分頑張れ」

賭けだった。隊長の判断が重いことは言うまでもない。沈黙の長い時が過ぎた。再びトランシーバーを握り、「状況報告願います。そろそろタイムリミットです」と問いかけると、「雪庇（せっぴ）の上に出た」と返答があった。そこが未踏峰ロプチンの頂上だった。

2009年11月7日午後3時36分（日本時間午後4時36分）。6人の神戸大学登山隊は、中国・チベット自治区東南部にあるカンリガルポ山群の一つロプチンを制した。



ロプチン登頂を果たした神戸大登山隊隊長の井上達男さん。神戸で小学校時代を過ごし、六甲山のロックガーデンが遊び場だった＝神戸市東灘区

井上は兵庫県香美町に生まれ、県立芦屋高、神戸大工学部に進学。山岳部ではリーダーを務めた。「高い山を制するナンバーワンより、オンリーワンを目指す」。人類の未知に挑戦する学術登山のパイオニアワークこそが、1915年発足の同部の精神だった。

OB会の山岳会でも活躍した。76年、28歳で参加した

海外遠征では、カラコルム山脈の未踏峰シェルピカンリ（7380メートル）で頂を踏んだ。

「頂上では世界一への野心とか競争心が消えて、純粋な気持ちだけが残る」

見渡す限りの「誰も見たことがない景色」。美しさにハッとし、味わったことのない達成感に熱くなった。下山後、恩師に言われた。「次は後輩のために」

神戸大登山隊は03年、カンリガルポ山群の未踏峰ルオニイ（6882メートル）に挑んだが、悪天候に阻まれて途中断念。赴任先の米国でその結果を聞いていた井上は帰国後、山岳会会長を打診された。若い部員が減り、OBの高齢化も目立つ。ルオニイ敗北も影を落とし、山岳会は苦境に立っていた。

滋賀県で会社社長を務める井上は、辞退も考えたが「苦境にあえて挑戦し、乗り越えよう」と06年に就任。同山群への再挑戦を掲げ、3年間の準備を経て、中国地質大との合同登山隊を結成した。

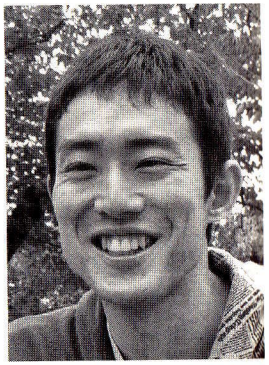
ロプチン登頂は天候にも恵まれ、つかむことができた。「こうすれば成功」という道筋はない。チームワークで障害を越えていく。それが醍醐味であり、また次に引き寄せられる。「地球上にはまだまだ未踏峰がある」。挑戦は続く。

実際の標高は100メートル高かった 自然と対峙「未知」を開く

カンリガルポ山群の未踏峰ロプチンにアタックしたのは、兵庫県豊岡農業改良普及センター職員の矢崎雅則(36)＝朝来市和田山町＝と、神戸大大学院生の近藤昂一郎(24)＝神戸市灘区＝だった。

近藤は長野県に生まれ、神戸大で本格的に登山を始めた。ロプチン挑戦の計画を聞いて好奇心に駆られ、真っ先に手を挙げた。神戸大登山隊長の井上達男から見れば経験も技術もまだまだ未熟だが、その若さにアタック隊としての「突破力」を期待した。

未踏峰ロプチンの山頂に立つ矢崎雅則さん。「音は何も聞こえない」。覆っていたガスが晴れ、青空が広がった（2009年11月7日、提供・神戸大学山岳会）



近藤昂一郎さん

2人は午前8時にキャンプを出発。海外遠征は初めての矢崎がリードし、近藤が続く。しかし出発から約7時間、矢崎は頂上を目前に高度障害に陥り、近藤と前後を交代する。薄れる意識。身体は鉛のように重く、動かない。視界は緑がかってきた。

「下りよう」と言う矢崎に、近藤は「もうすぐです。とりあえずここまで来てください！」と返した。矢崎の視界はさらにかすみ、気力だけで足を運ぶ。約10分後、「着きました」という近藤の声で頂に立ったことを知った。

「もう登らなくていいんだ、と思った」と矢崎。それほどに限界だった。GPS（衛星利用測位システム）で標高を測ると、想定された数値より100メートルも高い。初登頂がもたらした新発見だった。

矢崎は言う。「人間の力がはるかに及ばないところで、ちっぽけな人間が頂上に立つ。自然や自分自身と対峙し、その先に達成感がある」

近藤は「あんなに濃厚な青い空を見たことがなかった。天に向かって歩いているみたいだった」。途中、思わず景色に見とれた。「山頂に向かって鳥が飛んでいた。人がこんなに苦労して見ることができた景色を、いともたやすく見ることができる鳥がうらやましかった」

そんな2人を、残る隊員4人がサポートし、頂上まで「押し上げた」。近藤は「次に未踏峰に挑戦することがあれば、今度は自分が『サポート隊』に回る」と話す。

●

神戸大名誉教授の平井一正(79)＝京都市＝は、長く兵庫の学術登山をリードしてきた。甲南大では2000年まで理学部の教壇に立った。神戸大山岳会の前会長、甲南山岳会の名誉会員として後進の指導に当たる。

出身は京都大学山岳部。26歳のとき、ヒマラヤ西部の未踏峰チョゴリザ（7654メートル）を制した。

「人類で初めてそのピークに立った。未知を開く感激に足が震え、それが私の一生を決めた。未知は人類にとって大きな宿題。開けば人類の知識が増え、財産になる」

1962年にカラコルム山脈のサルトロカンリ、76年に同山脈のシェルピカンリ、86年にチベット南部のク

若いころの写真を手にする平井一正さん。隊員や隊長として制した未踏峰は4峰を数える＝京都市西京区

ラカンリにも挑んだ。

シェルピカンリはまったくルートが分からず、クーラカンリは資料写真1枚しかなかった。そんな強者（つわもの）の平井だが、一方で「未知も自然もすごく怖い」と打ち明ける。

いつまで続くか分からない嵐、突然の雪崩…。「危険がない冒険なんてない。でも、自然への勘を働かせ、克服する。大事なのは、警告をレシーブできるかどうか。それに気づくには、自然に対して謙虚になること」

神戸大登山隊長として03年に挑んだカンリガルポ山群・ルオニイの中途断念。それから6年。ロプチン登頂成功を誰よりも喜んだ。そもそも、平井がカンリガルポ山群をターゲットに定めたのは、クーラカンリを制した直後の86年にさかのぼる。

インドとの国境未確定地域に近く、外国人の立ち入りが制限された〝秘境〟。平井は登山許可を取るため中国国内に人脈を築き、政治情勢にアンテナを張った。約4半世紀を経て、努力が実を結んだ。

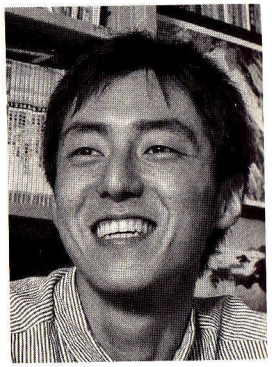
神戸大山岳会長時代、「若者に勇気を与える探検を」と繰り返してきた。「夢がないと、人間は老いるよ」

●

六甲山を抱く兵庫は、多くの探検家を育てた。芦屋で育ち、六甲山が〝庭〟だった地質学者の故藤田和夫。旧制第三高等学校（現京都大）時代から海外遠征を始め、自然人類学者の故今西錦司や国立民族学博物館初代館長の故梅棹忠夫らと、中国・大興安嶺（だいこうあんれい）やカラコルム山脈に挑んだ。

旧制甲南高等学校（現甲南大）山岳部は、六甲山で鍛えた岩登りを武器に、北アルプスに「甲南ルート」と呼ばれる登山ルートを21も築いた。

だが、若者の山岳部離れは兵庫も例外ではない。甲南大山岳部の昨年度の部員はゼロで、今は休部状態。かつては40人もの部員を誇り、今年90周年の関西学院大山岳部も、一時は2人まで減った。



山本大貴さん

丹波市出身の関学大社会学部4年、山本大貴（24）＝西宮市＝は08年、もう1人の部員だった先輩と、ヒマラヤ山脈の未踏峰ディンジュンリ（6196メートル）に登頂した。

初めての海外遠征。不安と苦しみの先に、360度の絶景が待っていた。頂上では達成感と安堵（あんど）感で、ふっと力が抜けた。下山後、また登りたくなった。「自然の中で、ステップアップしていける」。それが山の魅力だと言う。

現部員は6人。来年3月、6千メートル級のヒマラヤ山脈・パンブクリに後輩を連れて挑戦する。卒業を控え、挑戦する理由は一つ。「伝統を引き継ぐために」

（2010・11・7）

（2）巨人の系譜

冒険家の心 伝え続け

「2万、2万、2万フィート…」

現在地を伝える無線連絡を最後に、1984年2月13日、兵庫県国府村（現豊岡市日高町）上郷に生まれた希代の冒険家が、米・アラスカ州のマッキンリーで消息を絶った。植村直己。43歳の誕生日に合わせて標高6194メートルの山頂に立った翌日のことだった。

植村と府中小学校、府中中学校（現日高東中学校）で同級生だった正木徹（70）＝同市日高町＝は、一報に耳を疑った。「直己ちゃんに限って、そんなことはない」。地元の応援を本人に伝えようと設立した後援会で、会長を務めていた。

植村は地元の豊岡高校を卒業後、1年間の会社勤務を経て明治大に進学。山岳部に入ると、たちまち山に魅せられた。66年のモンブラン（4810メートル）単独登頂をはじめ、70年には日本人で初めてエベレスト（8848メートル）の頂を踏み、続けて北アメリカ大陸最高